

若年教師の授業実践における思考様式の当事者研究

— 中学校保健体育の現場から —

杉山 正幸

Participant study of thinking style in Young teacher's Physical Education Class

— In the Junior high school Physical Education Class —

Masayuki SUGIYAMA

1 問題と目的

近年、授業のスタンダード化が全国的に普及を始めている。授業のスタンダード化とは、国の学習指導要領において重視されているトピックについて、教育委員会が具体的な指導内容と方法をモデルとして提示するものが多い。授業中の子どもたちの姿勢、挙手や発言の仕方、机上の教科書・ノート・鉛筆等の置き方や使い方など、学習規律のモデルを含むものもある¹⁾。授業中の教師の指導や生徒の望ましい姿についての基準を定める教育政策のひとつである。

授業のスタンダード化は教師の反省的実践家²⁾としての力量形成を妨げること、子どもの個性や多様性を奪うことといった問題点がある。しかし、そのような背景に逆行し、一部の若年教師では授業のスタンダード化を望む声もある。これは、若年教師を指導する中堅教員の不足が原因の一つであると考えられる。十分な指導を受けない若年教師は、経験や知識が不十分である。その状態で実施する授業においては、多くの葛藤を抱くことが想定される。

佐藤ら³⁾は初任－熟達教師の思考の違いを明らかにしたが、若年教師の思考様式の特徴は明らかになっていない。また、浅田⁴⁾と高平⁵⁾の研究では、初任者教師の抱える苦悩は明らかにしているものの、何に影響を受け、どのように思考するかという思考様式については触れられていない。

そこで、本研究では、授業中における若年教師の思考様式が何の影響を受け、どのような特徴があるのかを当事者に基いて調べ、その一端を明らかにすることを目的とする。

2 研究方法

2-1 当事者研究とエピソード記述

本研究では、当事者研究とエピソード記述の手法を援用する。分析手法として授業者（当事者）のエピソード記述を用いる。当事者研究とは、自身の悩みや課題について当事者である自分自身で研究をする手法である⁶⁾。客観主義では排除されてしまい、当事者のみにしか分からない事柄を明らかにすることが可能である。

エピソード記述とは、「あるフィールドにおいて、人と人の「あいだ」に生じているものを関わり手や観察者がその「主観」において捉えること（「私」の体験として捉えること）」⁷⁾（鯨岡, 2005）であり、感じたことや思った事など、ありのままを文脈から切り離さずに記述する分析手法である。

2-2 本研究への批判と有益性

前述した研究方法は、主観が大きく影響することから、客観主義や行動主義からの批判がある。感じたことは主観的判断ではないのか、そう思ったかただけなのではないか、経験に再現性はあるのか、主張は反証可能性に開かれているのかといった科学的データにならないものを切り捨てようとする考え方である。

客観科学は当事者性を排除して、関与しない立場の研究者が研究対象に対して、常に外側から見ることで成立する。これが実践現場にも持ち込まれるために、実践の動向が行動中心主義に大きく傾斜してきてしまう。つまり、行動と行動の関係、客観的に書いた記録、データにまとめられた資料こそが分析方法として権威を持つと考えられている。

このような分析方法は、実際に人と人が接して

いる上で、行動や言動のみを取り上げるものであり、人と人が関わり合うときに生じることを真に理解しているといえない。当事者として人と関わっていく中では、相手の言動や行動のみでなく、相手の心や自分の心の動きを感じることができるはずであり、行動や言動のみで判断することはない。このような人と人のあいだの独特の空間や雰囲気は鯨岡は「接面」と表現している⁸⁾。

「接面」とは人と人とのあいだに成り立つ独特の空間や雰囲気のことを呼ぶ。これは、気持ちを向け合う人と人の間に生じる。例えば、母親が子どもを可愛いと思って関わる時に生まれる独特な雰囲気、本研究で言うならば教師が生徒の気持ちに寄り添ったり、思いをもとに生徒と対話を繰り返したりする時に生まれる2人の中の独特な空間である。

このように、人と人が関わる人間科学においては、客観主義（行動科学）のような分析方法では真に理解することはできない対象がある。鯨岡は自然科学にとって基本的な枠組みの客観主義（行動科学）パラダイムに対して、人間科学では接面（関与観察）パラダイムをとるべきだと提案している。

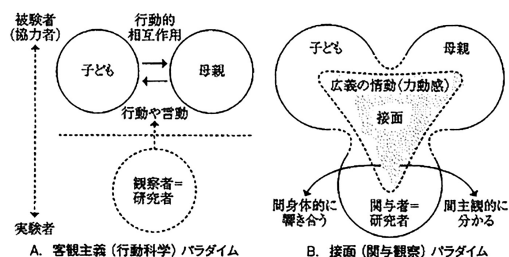


図1 客観主義パラダイムと接面パラダイム
(鯨岡「接面から見た人間諸科学」p205)

このことから、当事者研究とエピソード記述は文脈をそのまま分析することによって、当事者のみが理解したり、感じたりすることが可能な人と人との関係を真に理解できる点で有益である。

2-3 分析方法

対象者 : 常勤講師（2年目）
対象授業 : 中学生男子16名、女子20名の
1年生1学級、2年生2学級
対象期間 : 2020年6月～2021年2月

対象者の立場：保健体育の教科担任
(1年生は副担任も務める)

観察方法 : 授業後に行ったエピソード記述
分析対象 : 上記対象授業の実践において葛藤が生じた場面のエピソード記述

3 結果と考察

記述対象のエピソードは24件となった。本稿では、思考様式の特徴が顕著に表れている3つのエピソードを厳選し、明らかになった思考様式の特徴を示す。

3-1 結果

3-1-1 生徒が活動に取り組もうとしない場面

Nさんは体育の授業中に男女分け隔てなく関わる面が見受けられ、様々な運動に対して楽しそうに笑顔で活動する点が印象的な女子である。

しかし、マット運動が始まってからは壁に背中をつけて回ろうとせずに時間が過ぎていった。普段の体育のような楽しそうな表情が無かったので声をかけた。

T: やりたくないようなことがあるのかな?
N: 失敗するのを見られたくないんです。
T: 全員が勝手に回ってるから大丈夫だと思うんだけど。
N: あと、回ると気持ち悪くなるんです。
T: あんまり無理しないように回ればいいよ。

単元終了まで壁について回らない、消極的な様子が続いていた。他の教員に回ってない様子を見られると授業方法がよくないのではないかとと言われることを恐れたため、何とか活動するように促したが、様子に変化はなかった。そのため、数か月後、バドミントンの単元中に聞いてみた。

T: バドミントンは楽しい?
N: はい、めっちゃ楽しいです。
T: そういえば、どうしてマット運動はあまり回らなかったの?
N: 回転するのは楽しくないし好きじゃない。

受け答えの言葉ははっきりとしていて、表情も口角が上がった笑顔で話していた。やはり、Nさんからすると、この単元のマット運動に対して面白さや楽しさを感じることができないのだろうと考えられる。

3-1-2 教材を異なる方法で活動する場面

バドミントンはシングルスで行うのだが、チーム同士のような3人対3人で試合をしているコートがあった。最初は放っておいたのだが、2試合目になっても同じようにやっているため、声をかけた。このまま放っておいて、他のコートまで同じようになってしまうと授業として成り立つのか不安になったためである。また、時々通りかかる他教科の教員から、この状況を見て指導が不足している、授業として成り立っているのかと声を掛けられることに不安を感じた。そのため、シングルスをするよう声をかけると、以下のように応答してくれた。

Kt: でも、ダブルスも楽しいですよ。
 T: その気持ちはよく分かるんだけど、授業はシングルスだから、そっちに合わせて欲しいなあ。早めにきてダブルスやるぶんには、どうぞ、って感じなんだけど。
 Kt: 分かりました。

Kt君はバドミントンに対して魅力を感じていないようには思えない。ただ、シングルス以外にもバドミントンが楽しめることに気づき、授業中だが異なる方法でゲームをしていたと考えた。

授業者としては、シングルスで学習プリントを作り、考えていく予定を立てており、他のクラスも同様に進行していくように教科の先生と決めていたため、変更することはできないと思っていた。そのため、厳しく注意はせずに促そうと努力した。

3-1-3 授業内容に意見を言ってきた場面

普段はふざけたり、活動に集中できなかつたりする場面があるN君がマット運動では試行回数が非常に多く、積極的に取り組んでいるように見える。周囲の仲の良い男子とふざけるような様子もないまま授業が進行している。自分ができる技より、さらに難しい技へ挑戦するなど上手になろうとする意志を感じているときに話しかけてきた。

N: 先生、前宙（前方宙返り）してもいいですか
 T: 今回は体が床から離れちゃう技はやらな
 いかな。危ないし。
 N: 怪我まではしないから大丈夫ですよ。
 T: うーん。前宙じゃなくて、足を伸ばして

やる技（伸膝回転）はできた？

N: もうできましたよ。

T: 助走なくてもできた？

N: いや、助走無しはまだできないです。

T: じゃあ、助走無しでできるように、頑張ってみようよ。

今回の単元では、接転技群のみで授業を行うと体育科の教員同士で決めていたため、N君がやりたいといったことに対して反対せざるをえなかった。また、怪我をしてしまったら責任は授業者になってしまうと思ったので、N君が納得するように授業であるということを経験に、優しい口調でやらないよう促した。

3-2 思考様式の特徴

3-2-1 人間関係を権威の関係で捉える

「教師－生徒」の関係においては教師が上の立場であると考えられるためか、「優しい－厳しい」の軸で接していることが分かる。また、相手に共感できる部分や、自分にも非があると考えられる場合は3-1-3のように「優しく」接することを考えている。

「教師－保護者」「教師－先輩教師」の関係においては、若年教師は従属の立場であると考えている。実際に起きていない怪我に対して、3-1-1のように保護者へ過度な不安を抱いたり、3-1-2や3-1-3 授業内容や計画を変更することは先輩教師の意図と異なったりすることに不安を抱く。

振り返って考察をすると、実際に問題が起こるのとは不確実である。しかし、実践場面においては従う思考のみが存在する。このことから、若年教師は人間関係に対して権威の関係で捉える思考様式の特徴がある。

3-2-2 生徒を一面で捉える

一面で捉える、とは2つの意味合いが考えられる。まず1つ目は体育と他の教育活動を比較した際の一面である。例えば、体育の授業中と数学の授業中、もしくは特別活動中の生徒の様子は異なる可能性が高い。

2つ目は単元を比較した際の一面である。体育という教科の時間の中でも、活動自体は単元ごとに異なる。そのため、単元ごとに生徒の意欲や態度が異なることは想定できる。3-1-2のNさんのようにマット運動のみ消極的な面を捉えてしまう

ことが例として挙げられる。

しかし、実際には授業実践の時点では、このような思考様式は用いておらず、授業者として、今までの体育の授業の印象を基に、一面的に捉えてしまう思考様式の特徴がある。

3-2-3 授業を計画の遂行と捉える

授業において3-1-2, 3-1-3のように異なる活動を行ったり、提示してきたりする生徒がいる。実践場面において、事前に計画をしていた活動や内容を変更する思考様式がない。これは、前述した権威の関係で捉える思考が影響の一要因である。

また、若年教師という経験や知識の不足から即時に授業へ取り入れる柔軟な対応ができなかったことも考えられる。振り返って考察をすると、計画の変更に関して方法は考えることができる。

しかし、実践場面においては変更による問題が起こることを不安に思ってしまう。また、生徒がより学ぶことができる変更よりも、計画通り授業を進めることを考える思考様式の特徴がある。

3-2-4 授業の要素「教材・教師・生徒」のうち、問題を「教材」「生徒」に求める

3-1-1においては、問題の原因をマット運動という「教材」に対して求めている。マット運動は人によっては面白くない、と決めつけてしまい、「教材」を原因として考えている。

また、全てのエピソードに共通して、活動を行おうとしないことが「生徒」の問題として考える特徴もある。「教材」のみでなく、活動に対して意欲的になれない、従うことができない「生徒」に対して問題と捉えてしまうことが考えられる。

これらの問題に関しては、「教師」の工夫や指導方法で改善の余地は考えることができる。

しかし、実践場面においてそのような考えは無いことから「教材」と「生徒」を問題として捉える思考様式の特徴がある。

4 まとめ

本研究では、授業スタンダードと若年教師の葛藤という背景から、若年教師の思考様式が何の影響を受け、どのような特徴を持つのかを明らかにすることを目的とした。

当事者によるエピソード記述から、思考様式に

関して4つの特徴が明らかとなった。対人関係を権威の関係で捉える、生徒を一面で捉える、授業を計画の遂行と捉える授業の要素「教材・教師・生徒」のうち、問題を「教材」「生徒」に求めるといった4つである。

また、これらの思考様式の要因としては学校の規則や体育科の教員同士で決めた制約、責任を問われることへの不安、教員としての知識・経験の不足が一要因であると考えられる。

また、本研究では明らかにする段階で留まり、現状の授業改善や教師教育へ活用することまで言及できていない。今後、より多くの事例研究が蓄積されることによって普遍的な思考様式への影響要因と思考様式の形成過程が明らかとなれば、授業の改善、教師教育の充実といった他分野を含む多くの場面で活用されることが期待できる。

5 主要参考文献

- 1) 勝野正章, 自治体教育政策が教育実践に及ぼす影響－授業スタンダードを事例として－, 日本教育政策学会年報: 23: 95-103, 2016
- 2) ドナルド・ショーン著・佐藤学・秋田喜代美訳, 専門家の知恵反省的实践家は行為しながら考える, ゆるみ出版, 2001
- 3) 佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美, 教師の実践的思考様式に関する研究(1): 熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に, 東京大学教育学部紀要 30: 177-198, 1991
- 4) 浅田匡, 教えることの体験, 浅田匡他編, 成長する教師－教師学への誘い, 金子書房: 175-177, 1998
- 5) 高平小百合・大田拓紀・佐久間裕之・若月芳浩・野口穂高, 玉川大学教育学部紀要: 103-125, 2014
- 6) 石原考二, 当事者研究とは何か－その理念と展開, 石原考二他編, 当事者研究の研究, 学書院: 2013: 12-72, 2013
- 7) 鯨岡峻, エピソード記述入門, 東京大学出版, 2005
- 8) 鯨岡峻, 接面から見た人間諸科学, 小林隆二他編, 人間科学におけるエヴィデンスとは何か, 新曜社: 187-228, 2015

(指導教員 森 勇示)